藍野大学紀要，第 31 巻，2018，pp. 25-37

〔**Original Paper**〕

Influence of the Mother-son Relationship During Childhood on the Care Later Provided by Caregiving Sons

Sayuri Kitamoto*,** and Kenji Kuroda***

* Department of Community Health Nursing
** Kansai University, Graduate School of Health and Well-being, Doctoral Course
*** Kansai University, Faculty of Health and Well-being

Abstract

Objective : This study aimed to clarify the effects of images held by caregiving sons about their mothers during their childhood and the relationships between the sons and other family members, including the mothers being provided with care.

Methods : Data were collected through semi-structured interviews with 10 caregiving sons. Interview records were qualitatively analyzed using a modified grounded theory approach.

Results : Caregiving sons continued relationships with their mothers even after childhood. They felt that "only they could take care of their mother." Caregiving sons compared "the figure of a mother in their childhood memory" with "the figure of a mother who needed care." By doing so, they gained a better understanding of their mothers' present behavior from their mothers' lifestyle and personality in the past. Caregiving sons experienced "a sense of fulfillment as a result of caring for their mothers." However, they also suffered from the gap perceived between their mothers' present condition and the previously held images of their mothers. As a result, caregiving sons are more likely to experience "the burden of care as a reality."

Conclusion : Supporters need to better understand "the relationship between caregiving sons and their mothers since childhood and changes in family relations as a result of providing care." In addition, supporters need to recognize the abilities of caregiving sons and to support them so that "they can grasp the current situation objectively."

Key Words : caregiving sons, elderly mothers, modified grounded theory approach, relationship between mother and child

〔原　著〕

息子介護者にとって子どもの頃からの母子関係が母の介護に与える影響

北　本　さゆり[*,**]，黒　田　研　二[***]

【要　旨】
本研究は息子介護者が抱いている子どもの頃の母のイメージや，母を含めた家族との関係が介護に与える影響を明らかにすることを目的とした。母を介護したことのある息子 10 人に半構造化面接を実施し，M-GTA を用いて分析した。結果，息子介護者は成人期以降も母との関係を継続し，【介護できるのは自分しかいない】と感じていた。また，息子介護者は【子どもの頃の記憶にある母の姿】と【介護を必要とする母の姿】を照らし合わせ，母の言動を母の生き様や性格から意味づけていた。そして，【母を介護しているという充実感】を抱く一方で，昔のイメージとのギャップに悩み，【現実としてふりかかる介護負担】と相俟って心理的に追い詰められる危険性を孕んでいた。支援者は，【現在までの母との関係及び介護による家族関係の変化】を把握し，介護者が【現状を客観的に捉える】ことができるよう介護者が持つ資源をうまく活用できるように調整することが必要である。

キーワード：息子介護者，高齢の母，M-GTA，母子関係

Ⅰ．は　じ　め　に

高齢化の進展に伴い，2014 年には介護保険制度における認定者数が 591 万人を超え，介護保険制度が開始された 2000 年の認定者数 218 万人の 2.7 倍となっている。また，近年 65 歳以上の者のいる世帯構造が大きく変化しており，1986 年に 44.8% であった三世代同居が 2016 年には 11.0% と激減し，それに代わって独居世帯，老夫婦のみの世帯，親と未婚の子のみの世帯が増加している。三世代同居が多かった時代には，嫁や妻といった女性が介護を担うことが多かったが，世帯構造の変化により夫や息子といった男性が介護を担うことが増えてきている[1)]。

このような世帯構造の変化に伴い，男性介護者に関する研究や被介護者からみた介護者の続柄に焦点をあてた研究が行われるようになった。男性介護者に関する研究では，男性介護者は他の家族や支援者に相談しない傾向があり[2-5)]，社会的に孤立しやすい[6,7)]ことが指摘されている。また，家事・介護スキルや仕事との両立の難しさ[8-10)]なども示唆されている。

しかし，同じ男性介護者であっても，被介護者との関係性や経済的問題等から夫と息子では負担感が異なると考えられる。介護を行う息子（以下，息子介護者という）を対象とした研究では，横瀬[11,12)]は，娘介護者に比べて息子介護者は一人で抱え込み，社会から孤立してしまう傾向があることを指摘している。また，

* 藍野大学短期大学部専攻科
** 関西大学大学院人間健康研究科博士後期課程
*** 関西大学人間健康学部

平山[13]は，親の自立状態をできるだけ長く維持するために，手伝いを最小限に抑える「ミニマムケア」が息子介護者の特徴であると述べている。松井[9]は，男性ゆえの困難の中でも特に入浴介助や排泄介助などの身体接触を伴う介護に息子介護者は嫌悪感や困難感を抱いていると指摘している。続柄に焦点をあてた研究では，新鞍ら[14]は，経済的負担感は息子が夫，娘，嫁に比べて有意に高いことを示している。また，春川ら[15]は，介護保険関係事業所職員からみた在宅介護評価について，「息子が母」「夫が妻」を介護する場合に困難群が多かったと報告している。岩田ら[16]は，妻を介護する夫の介護継続に関する不安は高いものの，妻・夫ともに介護の充足感や受容感は高いことを示唆している。

このように介護者の続柄により介護困難感や介護相談の傾向などが異なる。介護保険制度において要支援又は要介護と認定された在宅の高齢者を同居で介護している者の続柄をみると，夫は 15.6%，息子は 17.2% である[1]。一方，2016 年高齢者虐待の防止，高齢者の養護者に対する支援等に関する法律（以下，「高齢者虐待防止法」という）に基づく対応状況等に関する調査によると，養護者による高齢者虐待 16,384 件（虐待者数 17,866 件）のうち，虐待者の続柄は息子が 7,237 人（40.5%）であり[17]，息子が介護者である割合 17.2% に比べ非常に高いことがわかる。つまり，息子介護者は，他の続柄の介護者に比べて虐待を起こしてしまうような心理状態に陥りやすいことが類推される。また，被虐待高齢者の約 8 割が女性であることから，母を介護する息子介護者の介護上の困難の大きさが推察される。息子介護者による虐待の要因として，近隣との交流のなさ，経済的問題，協力者の不在[18]や，虐待者と被虐待者の閉じた関係性[7,19]などが指摘されている。上田ら[18]は，被介護者が息子に介護してほしいと希望している場合は，虐待発生が低率であると分析している。しかし，配偶者喪失期にある高齢者の介護者としての選好を調べた研究[20]では高齢女性は息子よりも娘を望むことが明らかになっている。また，内閣府[21]が介護選好の国際比較を行った調査においても，日本では娘の選好が息子の 1.5 倍であることが示されている。

以上，述べたように息子介護者の介護する時点での負担感やその背景についての研究が行われてきている。しかし，介護者と被介護者が息子と母である場合，子どもの頃からの母との関係性や育てられたという実感が介護を行う上での感情に影響を与えている可能性が想定されるが，それを論じた研究は見当たらない。そこで，本研究は母を介護する息子が抱いている子どもの頃の母のイメージや，その後介護に至るまでの母を含めた家族員との関係が介護にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。この研究を行うことで，母を介護する息子介護者の困難感や肯定的感情にこれまでの母や他の家族員との関係がどのように影響しているのかを明らかにすることができ，息子介護者のこれまでの家族関係に応じた支援のあり方の方向性を示すことができると考える。

Ⅱ．研　究　方　法

1. 研究参加者

研究対象者は，在宅で実母を現在介護している息子あるいは過去に介護していた息子である。選出は A 市，B 市及び C 市にある介護支援事業所あるいは介護サービス事業所に勤務する介護支援専門員，訪問看護師等からの紹介による。また A 市にある男性介護者の会会員や筆者の知人に協力を依頼した。研究に関心を持っていただいた対象者に研究の趣旨について説明をし，研究の同意を書面上得られた 10 人を研究参加者とした。

2. データの収集方法

事前にインタビューガイドを作成し，研究参加者にそれぞれ 1 回の半構造化面接を実施した。面接時間は 1 回おおむね 1 時間半から 3 時間である。インタビュー内容は，介護を行うことに至った理由とその受け止め方，母親との関係性（介護実施前・介護開始後・子どもの頃），周囲の家族との関係性，就業状況と経済的不安の有無，介護サービスの利用の有無と開始時期及びその理由，介護を行う上での困難感とそれを感じた時期，介護を行う上での肯定的感情とそれを感じた時期である。データ収集は 2016 年 7 月から 2018 年 2 月にかけて行った。

3. 分析方法

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTA という）[22,23] を用いて分析を行った。本研究は前述の目的を達成するために，母を介護する息子が自分の子どもの頃から介護を開始するまでの母との関係をはじめ，介護開始後の家族関係の変化や心理的な変化などをプロセスに沿って分析していくこととした。人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相

互作用に関わる研究であること，研究対象とする現象がプロセス的性格を有していることからプロセスを構造的に捉えることができ，かつ重要な語りについて文脈を切り離さずに分析することができる手法であるM-GTA を用いることを選択した。ここで，分析焦点者を「母親を介護している息子」とし，分析テーマを「子どもの頃からの母との関係が介護に与える影響」と設定した。逐語録の中から，分析焦点者と分析テーマに照らしてデータの関連箇所に着目し，概念名，定義，具体例を記入した分析ワークシートを概念ごとに作成した。すべてのデータから類似例や対極例を抽出し，比較検討しながら概念を作成し，生成した概念と他の概念との関係を検討した。さらに，複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し，データからこれ以上新しく概念やカテゴリーが生成されないことを確認して，カテゴリー相互の関係をみて分析結果をまとめた。

4. 倫理的配慮

研究参加者には，研究の趣旨を理解していただいた上で，参加の有無については研究参加者の自己決定とした。また，研究の参加途中であっても，いつでも辞退できること，辞退したことにより不利益が生じることは一切ないこと，その際の収集データについては廃棄を希望される場合は廃棄することを約束した。研究で収集したデータから作成した逐語録は，個人が特定されない形に変え，それらのデータは研究目的以外に使用することは一切なく，情報の秘密を守り厳重に保管し，研究が終了すれば廃棄することとした。なお，本研究は関西大学人間健康学部研究倫理委員会の承認を得て実施している。

Ⅲ. 結果と考察

10 人のインタビューから得られたデータをもとに，息子介護者の子どもの頃からの母との関係が介護に与える影響に当てはまる概念と，複数の概念を関連させたカテゴリーを生成した。生成された概念数は 25 で，カテゴリー数は 7 であった（表 1）。それらを時間の経過に沿って配置し，分析した。M-GTA は，質的データを元にした深い解釈を重視する分析方法であるため，分析結果と考察をまとめて記述する。なお，生成したカテゴリーは【 】，概念は『 』で示す。語りのデータは「 」で示し，語りの内容を補足する言葉

表 1　カテゴリーおよび概念

カテゴリー	概　　念
子どもの頃の記憶にある母の姿	母が若い頃苦労してきたことを知っている（間接的）
	母が苦労している姿を見てきた（直接的）
	子どもの頃印象に残っている母の姿
介護を必要とする母の姿	母の言動を母の生き様や性格から意味づける
	今の母の性格を昔の性格と照らして理解する
	母の介護を通して自分の性格を振り返る
	自分を育ててくれた母とのギャップ
	子どもを見る母のまなざしを感じる
現在までの母との関係及び介護による家族関係の変化	子どもの頃の家族の関係
	成人期以降も継続する母（両親）との関係
	介護による家族関係の変化
介護できるのは自分しかいない	成人期以降のきょうだいとの関係
	成人期以降の家族関係が介護を引き受ける要因となる
	介護できるのは自分しかいない
現状を客観的に捉える	介護者自身が持つ資源
	介護者によるコーディネート
	母の性格に応じた介護方略
	同じ立場であることが仲間意識を生み出す
母を介護しているという充実感	母を介護しているという充実感
	母が居ない生活を見据える
	できるだけ長く生きてほしいと願う
	介護を肯定的に振り返る
現実としてふりかかる介護負担	母への思いを介護負担が打ち消してしまう
	排泄介助の負担と戸惑い
	終えてから悔やむこと

表２　研究参加者の概要

対象	年代	居住	配偶者の有無	母の年代	現在の介護状況	介護年数	母の認知症の有無	介護時の父の状況	介護時のきょうだい
A	60 歳代	同居	無	90 歳代	要介護５在宅	12 年	有（診断無）	死亡	弟
B	60 歳代	別居	有	90 歳代	病院で死亡	11 年	有	同時介護	弟２人
C	40 歳代	別居	無	80 歳代	要介護２入院	12 年	無	入院	弟
D	70 歳代	同居	有（別居）	90 歳代	要介護５在宅	15 年	有	先に介護	兄・妹
E	60 歳代	同居	有	80 歳代	要介護５在宅	4 年	無	同時介護	妹
F	60 歳代	同居	無	80 歳代	病院で死亡	10 年	無	同時介護	妹２人
G	60 歳代	同居	無	90 歳代	要介護３在宅	10 年	有	死亡	姉・弟
H	60 歳代	同居	有	80 歳代	要介護４在宅	8 年	無	死亡	妹
I	60 歳代	同居	有（別居）	90 歳代	自宅で死亡	11 年	無	後に介護	妹
J	60 歳代	同居	無	90 歳代	要介護１在宅	3 年	有	先に介護	妹

母が亡くなっているかたの母の年代は亡くなられた年代を，介護者はそのときの年代を記載

を（ ）に追記する。

1. 研究参加者の概要

研究参加者は表２に示すとおり，40 代１人，60 代８人，70 代１人であった。被介護者との居住では，同居８人，別居２人である。配偶者のいる人は５人で，配偶者のいる５人のうち２人が配偶者と離れ親と同居しながら介護を行っていた。被介護者の年代は 80 代４人，90 代６人である。介護状況は在宅介護中６人，入院中１人，介護を終了した人３人である。介護年数は３年から 15 年で，10 年以上の人が７人である。被介護者の認知症の有無は，診断を受けていない人も含めて，認知症の顕著な症状を呈している人が５人いた。ただし，認知症でない人のなかにも介護経過中に軽度の記憶障害を呈している人もいた。父親の状況では，父が高齢になるまでに亡くなっていた人が３人，両親を同時に介護していた時期のある人が３人，母の介護の前に父を介護していた人２人，後で介護した人１人，母の介護中に急性疾患で入院し亡くなった人１人であった。研究参加者は全員きょうだいがおり，D 氏を除いた９人が長男であった。

2. 息子介護者にとって子どもの頃からの母との関係が介護に与える影響

息子介護者は，子どもの頃から現在に至る家族関係の中で，介護を行う前から【介護できるのは自分しかいない】と感じている。そこには介護開始までの母と息子の関係が大きく影響している。介護を開始した息子介護者は，【介護を必要とする母の姿】を見て介護しながら【子どもの頃の記憶にある母の姿】を時折思い出し，自分が介護することを意味づける。母の生き様や性格を知るからこそ，それに応じた方略を見いだせる一方で，育ててくれた母とのギャップに悩むこともある。息子介護者は【現状を客観的に捉える】ことができれば，介護役割を担う責任感と相俟って【母を介護しているという充実感】を味わうことができる。しかし，現状を受け入れることが困難な場合は，【現実としてふりかかる介護負担】により，身体的にも心理的にも追い詰められ，母への思いが打ち消されてしまうことにもなる。このような肯定的感情や否定的感情は介護を終えてもなお息子介護者の心に残っている（図１）。

(1) 子どもの頃の記憶にある母の姿

子どもの頃の記憶にある母の姿に関して，『母が苦労している姿を見てきた』『母が若い頃苦労してきたことを知っている』『子どもの頃印象に残っている母の姿』という概念が生成された。研究参加者の母親は 80～90 歳代であり，戦争前後の時期を生き抜いた世代である。その混乱期に自分たちを育ててくれた母の苦労を，息子介護者は両親あるいは親戚から聞いて知っていた。また，苦労して育ててくれた母の姿を直接見てきており，次のように語られた。

A 氏「親父もしょっちゅうお金持って外に出てましたからね。１週間ぐらいふらっと行ったりとかね，そんなんしてたから。だから，子ども２人必死で育てたんやと思います。」

J 氏「よう働いたんですよ，おふくろ。親父が会社人だったのが，自分で独立して，鉄工所をこの近くに作って，でも結局だめにしてしまったんですけどね。で，おふくろはキャディしたり，ゴルフ場の。もう働きに働いて。」

G 氏「それでもね，いちばん戦争のね，いちばん被害を被ってきた世代ですからね，そういうのを乗り越えて生きてきてますからね，あまり無碍にはできません。」

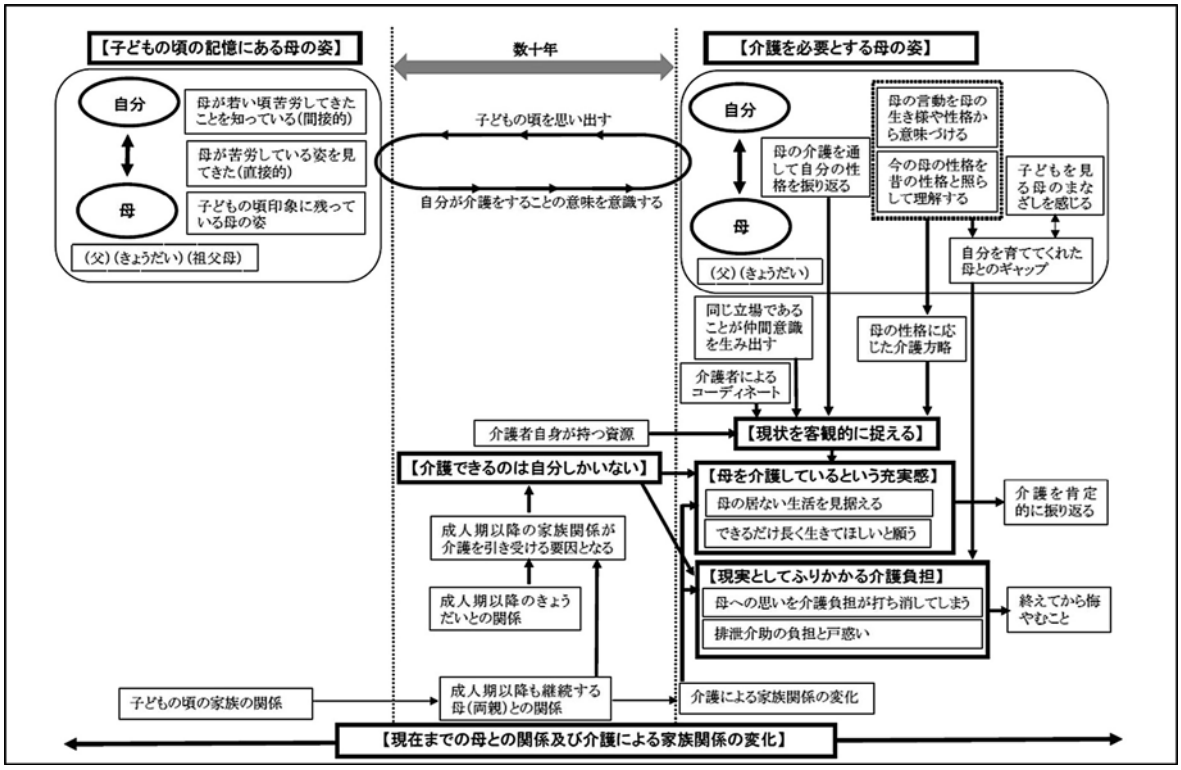

図１　息子介護者にとって子どもの頃からの母との関係が介護に与える影響

息子介護者は『子どもの頃印象に残っている母の姿』について，おおよそ小学校中～高学年の頃の出来事を語った。10 人中 7 人の母親が就業しており，多忙な中でも自分への愛情を感じる出来事が語られた。母の自分への育て方をそれぞれが，“厳しい”“優しい”“放任”などと捉えながらも，そのように育ててくれたことに感謝していた。ただし，C 氏は，幼少期に両親にほとんど構ってもらえず，ときに母から無理心中を提案されるなど虐待と思われる行為を受けて育ってきた。C 氏は他の研究参加者とは異なる心情を語っており，(5) 現状を客観的に捉える，の箇所で分析する。

(2) 介護を必要とする母の姿

介護を必要とする母の姿に関して，『母の言動を母の生き様や性格から意味づける』『今の母の性格を昔の性格と照らして理解する』という概念が生成された。息子介護者は，今の母の言動を母の生き様や性格から意味づけて，理解しようと試みていた。そして，介護を行うなかで時折昔の母の姿を思い出し，今の母の性格を昔の性格と照らして理解していた。

H 氏「本人は（孫の結婚式に）出たくないわけです，ずっと。あの自分のね，弱いとこの姿を見せたくないんです。」

A 氏「昔からそういう傾向あったような気はしますけどね。あんまり人づきあいがうまくないというかね，大人の付き合いというのが，そういうのがなかなかできないみたいで。なんか幼稚園児が 92 歳になったみたいですわ。」

H 氏は，弱い部分を他人に見せたくない母の性格からデイケアも本当は行きたくないのだろうと慮っていた。また，A 氏はショートステイなどで他の利用者や職員とトラブルを起こしてしまう母について，12 歳で働きに出て周囲の大人からいじめを受けたため，大人同士の付き合い方がわからないのだろうと解釈していた。

息子介護者は自分が大人になるまでに知っていた母の性格と今の母の性格を照らし合わせて母の性格が昔と変わらないと感じていたり，以前から知っていた母の性格が加齢とともに強く表出されていると感じていたり，病気などにより性格のある部分が変化したと感じていたりしていた。以前と比べて母の性格が変化したと感じた場合には，いずれもその理由を自分なりに解釈していた。

また，息子介護者のなかには『母の介護を通して自分自身の性格を振り返る』者もいた。E 氏は介護を行うことにより短気だった自分を見つめ直し，気持ちをコントロールできるようになったと話す。H 氏は勝気な性格の母と喧嘩を繰り返して疲弊し，母を何とか自分の思い通りに動かせようとしていた自分に気付いた。このように，介護者と被介護者が介護を通して距離が近づくなかで，介護者は自分を客観視する場合もあった。

母が認知症などの疾患により性格の変化が見られる場合，息子介護者は『自分を育ててくれた母とのギャップ』に悩むことがある。

J 氏「今のおふくろが合わないんですよ。私のあれと。イメージが。しょうがないんですけどね。（中略）私の頭の中でギャップがありまして，なかなか今のおふくろを認められないんです。」

B 氏「もう介護したおふくろというふうにすり替わっていってる。刷り込みが入ってしもて。昔ああいうのがあったなということより，介護したときの記憶のほうがもう勝ってる。」

J 氏は優しくて綺麗好きだった母の今の姿を認められず，母を怒ってしまいそうになるのが怖いと話す。B 氏は最初は母の変化を受け入れられなかったが，病気だと割り切ることで心理的な負担は軽減した。しかし，介護を終えたあとは子どもの頃の母よりも認知症の母の姿のほうが焼き付いてしまったと語る。自分を育ててくれた母の姿と今の母の姿の違いが大きいほど，介護者はそのギャップに落胆する。ただ，認知症が進み，息子のこともわからなくなった状態でも，時折『子どもを見る母のまなざしを感じる』ことがある。

D 氏「歩いてベッドのところを通ったんですわ。ずっと，こうして（顔をゆっくり動かしながら）見るんですよ。あれは，なんか母親の目ですよね。」

G 氏「（僕のことは）それはわかります。それだけは。他（の人）はたまにしか顔を見いひんからね，誰かわからんような顔をしてます。」

G 氏は，母が認知症による見当識障害により人の区別がつかなくなっても自分のことだけは理解できていると断言する。また，D 氏は以前のイメージとは異なる母であっても，そのまなざしから自分を育ててくれた母の愛情を感じ取ることができている。『自分を育ててくれた母とのギャップ』を埋めるためには，母の状態を客観的に捉えた上で被介護者としての母と新しい関係を築くことが必要になるであろう。それと同時に昔の母を彷彿させることがあれば昔の母のイメージを消失させることなく介護を続けられるのかもしれない。

(3) 現在までの母との関係及び介護による家族関係の変化

『子どもの頃の家族の関係』として，きょうだいとの関係や家族の中での自分の位置について言及する場合がみられた。研究参加者にはすべてきょうだいがおり，D 氏以外は長男であった。D 氏は子どもの頃，母から最も大事にされてきた兄が，今，介護に携わらないことに憤りを感じている。また，G 氏は自分よりも学業等の成績がよかった姉や弟ではなく，自分が介護をしていることを誇らしげに語った。

しかし，子どもとして養育してもらっている期間はせいぜい 20 年あまりである。その後親の介護を行うようになるまでに 30～40 年という長い年月がかかる。この成人子の期間を親とどのように付き合ってきたのかが，介護を行う上での心理状態に大きな影響を与えると考えられる。研究参加者は，高校または大学卒業後，介護に至るまでの数十年間，母（両親）と比較的親密な関係を保持していた。未婚である A 氏，F 氏，G 氏は生まれてからずっと母と一緒に暮らしている。また，結婚と同時に同居した E 氏，H 氏も同様である。別居していた B 氏，C 氏，D 氏，J 氏も同じ市内あるいは隣接市に居住し，何かあればすぐに駆けつけることができていた。両親と遠く離れて住んでいたのは I 氏だけである。I 氏は両親をつなぐ役割が自分にあると実感しており，毎年正月に帰省し，夏季には両親と一緒に旅行するなど，常に両親の状況を把握していた。このように，『成人期以降も継続する母（両親）との関係』が介護を引き受けることに繋がっているとともに，介護開始後の母と息子の距離感にも大きく影響していた。

介護が始まると，『介護による家族関係の変化』が生じる。D 氏や I 氏のように配偶者と離れて親と同居して介護を行う場合は，同居家族の構成が変わることとなり，その変化は著しい。人が訪れることによって母が混乱するのではないかと考えた B 氏は毎年来訪してくれた弟たちを実家に近づけないようにした。G 氏は母が重度になるにつれてきょうだいの来訪頻度が

減ったと話す。そこには，重度な介護を適切にできるのは自分しかいないという矜持があり，きょうだいが来訪して手段的サポートを行ってくれることを求めていなかった。また，A 氏は介護を開始して数年後，おそらく嫁姑のトラブルにより唯一の家族である弟と連絡すら取れない状況となってしまった。このように介護により家族関係が変化し，介護者が孤立しかねない状況に陥る場合がある。その一方で，E 氏の娘は，父と祖母を心配し毎週末嫁ぎ先から帰省している。また，D 氏は他県に住む妹が訪ねてくれるのは母が居るからであって，母が家族をつないでくれていると語り，介護により家族の絆が深まることも示された。このように『介護による家族関係の変化』は，良い方向にも悪い方向にも変化することが示唆された。

(4) 介護できるのは自分しかいない

介護できるのは自分しかいないということに関して，『成人期以降の家族関係が介護を引き受ける要因となる』『成人期以降のきょうだいとの関係』という概念が生成された。成人期以降の家族関係が息子介護者の介護を引き受ける要因となっており，特に成人期以降のきょうだいとの関係に影響されていた。自分ときょうだいとの関係，きょうだいの生活状況，親と自分との関係，親ときょうだいとの関係などから，息子介護者は介護を始める前から『介護できるのは自分しかいない』と自覚していた。

A 氏「兄弟おるけど，絶縁状態でね。全然だめですわ。交流があったんですけどね。7 年ぐらい（前）からちょっとだめになってしまって。嫁姑問題と思うんですけどね。弟の奥さんと。」

C 氏「（母と同居している）弟のほうはといったら，もうずっと引きこもりというのをしてるので。あの，（病院関係者などはまず弟を）呼ぶんやけれど，どうしていいかわからないというところで，僕のとこに（電話が）かかってくる。」

F 氏「なんか自然にそうなっていたような感じですね。妹の場合はよそに嫁いだというのがあるでしょ。だから，向こう（嫁ぎ先）の人のこともあるし，結局自然の成り行きでそうなっていたという，そんな感じかな。」

実際に身内に支援者がいない者は A 氏だけであり，他の研究参加者は個々によりサポートの種類は異なるが，きょうだいや妻から評価的・情緒的・手段的サポートが得られる状況であった。しかし，妻から手段的サポートを得ている E 氏や H 氏でさえも，「私が入院とかは絶対にできないんですよ。私が入院イコール母があかんということですから。」（E 氏）や「僕，上（天国）上がったらやばいから。（中略）僕が動けなくなったら絶対この家は（母の）面倒見きれないから。」（H 氏）というように自分がしている介護以上のことをできる者はいないという強い思いを語った。

(5) 現状を客観的に捉える

介護者がすでに持っている問題への対処能力や周囲の人間関係なども含めた社会資源，介護技術や制度に関する知識など『介護者自身がもつ資源』の豊かさが介護者の心理的負担の軽減に影響を与えていた。B 氏は，定年前に企業内の保険代理店に異動となり，そこで得た知識を介護に活かすと同時に，自らが成年後見人となり金銭管理も行うようになった。また，F 氏や I 氏は調理を行うことを悲観することなく，惣菜を買うことから始めたり，レシピ通りに作るなど状況に応じた対処を行っていた。

被介護者や介護者自身の生活，家族や周囲の人との関係などを最も把握しているのは介護者自身である。つまり介護者がサービスの種類や内容をある程度把握し，それをうまく組み合わせる調整力を持っていれば母にとって最適なケアプランを考案することができる。そして仕事などでマネージメント業務を経験した人であれば比較的スムーズにプランを考えることができるであろう。そこで，事業所の特徴や介護報酬などを熟知した介護支援専門員が，『介護者によるコーディネート』により考案されたケアプランを効果的で洗練されたものに仕上げていく際，介護者がより主体的に関わることができれば，前向きに介護を行うことができると考える。

息子介護者は母の生き様や性格を知っていることを活用し，『母の性格に応じた介護方略』を実践していた。

J 氏「演技は結構します。バタンと倒れてみたりして。“どうしたん？”って言うから，ちょっとどうのこうので“しんどい”って言って，心配させたほうがいいかなって思って。たまにですけどね。泣いてみたり，怒ったり。」

H 氏「他人に対していい顔をするんやから，他人を使えばいいわけで。そういうことかなと今思います。」

J氏は，息子を心配する母の性格から，わざと心配させてデイサービスに行ってもらうように演技をしていた。H氏は，息子だからわがままを言ってしまう母の性格から，あえて他の人から提案してもらうよう依頼していた。このような方略は一度でうまくいくというより試行錯誤を重ねるなかで，母にあった方法を見出していた。介護方略を思いつくということは，心理的にある程度落ち着いており，母の状態を客観的に見ているといえる。

現状を客観的に捉えるために，同じ立場である介護者との出会いも重要である。A氏やB氏は男性介護者の会で，相互に悩みを打ち明ける仲間がいた。D氏は趣味のサークルで他の介護経験のある会員と悩みを吐露できる関係になっている。このように，『同じ立場であることが仲間意識を生み出』し，他者の経験を知ることで，自らの介護を客観視することができていた。

ところで，幼少期に虐待と思われる行為を受けて育ったと感じているC氏は介護をどのように受け入れ実践しているのであろうか。C氏の子どもの頃の母についての語りを以下に記載する。

C氏「小学校のときなんか，散々言われましたよ。“一緒に首つって死のう。”って言うのを。平気で言われましたよ。理由って何もないです。わからないです。たぶん，親父と揉めたんやなあと。（中略）“これ食べてみ，おいしいで。”って。（サッカリンを）食べさせられて。“うわ，すごい甘いわ，これ何？”って言うたら，“ああ，これほんまは食うたらあかんやつや。”って。」

C氏は，上記以外にも，幼少期に母に話しかけるだけで怒られたり，食事を作ってもらえず小学校就学前から調理をしていたと語る。それでも，引きこもりの弟に介護を任せるわけにはいかず，障害をもつ小学生の娘を一人で育てながら，別居で母を介護している。

C氏「（居住地は実家から）ほんとにちょっとですね。自転車で5分。10分もかからないと思います。だって何かあったら呼ばれるやろうなと思ったから。そこは覚悟した上です。（中略）（母の他者へのクレームは）前頭葉（の障害）もあるし，元々持ってた性格もあると思うんです。うん。本人の我というか，自我というか，それが表面にボンと出て，前頭葉やられて，リミット効かへんようになった。（中略）（母に対する怒りはないかという問いに）僕ですか？僕もうあきれて，うん。もうあかんわと思いました。（中略）何言ってもあかんわ，やるようにやりぃな，行き着くとこまで行ったら，助けるわと思う。」

C氏の母への介護は12年に及ぶ。一年前までの3～4年は精神的に不安定となり，精神科にも通っていた。今は，周囲へのクレームを繰り返す母の言動にあきれながらも冷静に分析し対処している。C氏は介護福祉士としての経験を持つ上に，母の介護開始後に本格的に介護支援専門員の仕事を始めた。このように介護の知識や応用力を身につけたこと，長期に及ぶ介護の中で母を客観視できる適度な距離感をつかめたこと，将来の予測とそれに対処できる方法を知っていることが，母の介護を客観的に実践できることに繋がっているのではないかと考える。

(6) 母を介護しているという充実感

【介護できるのは自分しかいない】という責任感を抱えている息子介護者は，【母を介護しているという充実感】も抱いていた。

E氏「朝起きて，母が元気で，ちょっとずつでも良くなってるわけですね。その姿を見ると，努力している成果が出てるわけですから。」

J氏「（母が）やっぱり僕に頼っているというのは，ものすごくありますね。」

自分の介護により母の状態が改善したこと，母が自分を頼りにしていること，育ててくれた母への恩返しができていること，介護により自分の生活が充たされていることなど介護を前向きに捉える内容がすべての研究参加者から語られた。

また，先に逝くであろう『母の居ない生活を見据える』ことも，今の介護を充実したものにするために重要である。

H氏「社会との接点ということで考えると，今ボランティアをやろうと思って，ボランティアをやってます。（中略）引きこもってたら，ずっと引きこもりのままになるので，ちょっと外に出なあかんなと思って。」

G 氏「介護を始めるとまず初めに，どう言いますの。デイサービスに始まって，（中略）だんだん増えていくんですけども。死ねばその瞬間にすべての契約は終了ですからね。一斉に終わりですから。次の日から一斉に何も無くなりますから。」

社会的接点の少なさを危惧している H 氏は敢えて介護中からボランティア活動を始めた。G 氏は母の死とともに社会とのつながりがすべて遮断されてしまうことを予測し不安が増強する。被介護者が亡くなったあとの介護者の生活も見据えた支援が必要である。

実際に母の介護を終えた研究参加者は 3 人であった。それぞれに介護を振り返ってもらったところ，肯定的に振り返る部分と後悔として残っている部分の両方が語られている。どちらの思いが強く残っているかは人により異なる。また，同じ出来事を肯定的にも否定的にも捉えることもある。「もうやり切ったと思います。」（B 氏）のように，できる限りのことはしてきたという達成感や母の思いを叶えることができたという満足感が『介護を肯定的に振り返る』ことに繋がっている。

(7) 現実としてふりかかる介護負担

母への愛情を抱いていたとしても，介護負担が増大するとその愛情を忘れてしまうくらい負担感に覆われてしまい，『母への思いを介護負担が打ち消してしまう』ことがある。

A 氏「おふくろがおらん時はね，ちょっと優しい気持ちになるんです。なんかどっか食べさせに行ってやろうとかね，顔を合わせて，わぁーわぁー言い出したら，そういう気持ちはきれいになくなりますね。腹立ってきますね。すごい，そのストレスが強力ですよね。そういうなんか，優しい感情を全部押し流してしまいますわ。」

また，G 氏は寝たきりの母を抱えて食卓に連れていき，1 時間以上をかけて食事介助をするほど献身的に介護を行っている。しかし，便が寝衣や寝具に漏れるなど手間が増大したときには自分でも虐待と感じるほどの言葉を浴びせてしまうという。また，介護の中でも息子介護者は『排泄介助に負担と戸惑い』を感じていた。

E 氏「まずいちばん最初に私から抵抗がありましたね。やっぱり女性ですから，なんぼ親でも女性ですからね。」

A 氏「動くなって言ってるのに動くんですよ。また，足で踏みつぶしたりとかするでしょう。床に落ちたやつとかね。手にも付いたり，いろんなとこに付くからね。」

E 氏のように異性を介護することの抵抗は数人にみられたが介護だと割り切ることができれば，その戸惑いは消失していく。しかし，排泄介助行為は毎日何度も行うという身体的負担と，汚物処理という嫌悪感が長期間にわたり継続していくものであり，負担軽減のための対応策が必須である。また，このようなネガティブな感情は『介護を終えてから悔やむこと』に繋がっていく可能性がある。介護中も冷静に対処してきた B 氏でさえ，認知症状が出現してきた母から，弟たちを遠ざけた自らの選択を今でも悔やむ。また，F 氏は施設に入所した母の足がやせ細っていくのを感じながら何もできなかったことを後悔する。介護を終了したあとで，介護者がそれを糧にして，自分の人生を生きていくためには，後悔だけでなく同時に肯定的に振り返ることと，悔いの部分を過去のこととして割り切れるよう支援することが必要である。

Ⅳ. 総　合　考　察

1. 本研究から得た知見

本研究で，母を介護する息子は，母が以前苦労してきたことを直接的あるいは間接的に認識しており，苦労しながら自分を育ててくれたという感謝の気持ちを表出していた。その思いが，「無碍にはできない」という言葉に象徴されるように介護を行う動機となっていることが示された。さらに，息子介護者は自分を育ててくれた頃の母の姿と，今目の前にいる介護を必要とする母の姿を照らし合わせ，母の言動を母の生き様や性格から意味づけ理解していた。そして，息子介護者の多くは子どもの頃の母の印象について，自分が小学校中～高学年の頃の母を想起していた。服部[24]は，思春期（12～18 歳）の一つの特徴として心理的な親子の別離を挙げている。また，小此木[25]は，乳幼児期に実際の存在以上に美化したり理想化していた父母の姿について，思春期に入るとそれが錯覚だということに気づき，批判力が高まって，内的な対象喪失が起こるという。また，思春期に入ると，大人との関係より

も，友人関係に強い関心を抱くようになり，親子のコミュニケーションが不足しがちになるといわれている[26]。これらのことから，学童期に心の中で大きな位置を占めていた母の存在が，徐々にその重みが軽減し，思春期に入る頃には相対的に小さくなっているのかもしれない。研究参加者である息子介護者が思い出す子どもの頃の母の姿は，心の中で大きな位置を占めていた頃の母であり，今の母の姿と比べるのもその頃の母の姿であった。

思春期以降，母（両親）と心理的に一定の距離ができるものの，介護が始まるまでの30～40年という長期間，息子介護者は親の状況をおおよそ把握できる環境にあった。研究参加者のうち成人後も同居していた人は勿論のこと，遠方に居住していた人も定期的に親と顔を合わせたり，何かあればすぐに駆けつける関係を継続していた。このことが，介護を引き受ける一つの要因となっていた。中西[27]は，20代未婚の男女を対象に若者の老親介護志向を調査しており，成人子の老親介護志向は息子よりも娘のほうが強いことを示している。また，同調査では「わからない」という回答が多く，介護を引き受けるかどうかは今後の家族関係に左右される可能性を表出していた。家規範が弱くなってきている現在，長男が親の介護をすべきという意識が薄れつつあり，介護を引き受けるがどうかは，成人してから介護開始までの期間の家族関係の影響を大きく受けると考えられる。本研究においては，すべての研究参加者にきょうだいがいたが，他のきょうだいではなく【介護できるのは自分しかいない】という思いを強く抱いていた。それは，他のきょうだいが義父母の介護や仕事等で忙しいこと，遠方に住んでいること，母との仲が悪いことなどを理由として挙げており，結果的に自分しかいないということを示している。また，配偶者のサポートを得ている介護者からの「自分以外には母を看ることはできない」という語りを通して，自分の介護以上のものを提供できる者はいないという自負を感じることができた。

息子介護者は昔の母の姿を知っているからこそ，『自分を育ててくれた母とのギャップ』に悩むこともある。そこに，【現実としてふりかかる介護負担】が大きくなると，心理的に追い詰められてしまうことになりかねない。また，介護により家族関係が悪化した場合など他者に頼ることができない状況では，より心理的負担が増すことになる。研究参加者からは，実際に手を挙げてしまったり，傷つける言葉と知っていながらも言い放ってしまったり，布団を被せてしまったりした体験が語られ，【母を介護しているという充実感】の一方で，追い込まれた心理状態に陥る息子介護者の現状が明らかになった。

【介護できるのは自分しかいない】という思いは，【現状を客観的に捉える】ことができれば，【母を介護しているという充実感】に繋がる。【現状を客観的に捉える】には，母の生き様や性格を知っているからこそ活用できる『母の性格に応じた介護方略』や，これまでの人生で蓄積したマネージメント力，あるいは介護を通して積み重ねた知識や技術など『介護者自身が持つ資源』が重要な役割を担う。幼少期や学童期に母から虐待と思われる行為を受けてきたと感じているC氏は，仕事で得られた知識や技術及びマネージメント力から，他者と頻回にトラブルを起こす母の行為も客観的に受け止め，対処していた。その際，自分への虐待行為を行っていた昔の母の性格と，トラブルを引き起こす母の現状を照らし合わせ，母の心理状態を推測した上で最善の方法を選択していた。

しかし，息子介護者のなかには【介護できるのは自分しかいない】という状態を，受容することができないまま介護役割を担ってしまう場合も少なからず存在する。国立社会保障・人口問題研究所[28]によると，1990年に5.57%であった男性の生涯未婚率は，2015年には23.37%まで上昇し男性の4人に1人が未婚である。つまり，未婚のまま成人後も親と同居している男性が増加していると推測され，その場合，親が要介護状態になることにより本人の意思とは無関係に必然的に主介護者としての役割が課せられてしまうこともある。未婚であるため配偶者のサポートはなく，孤立してしまう可能性も高い[7]。今回の研究参加者は，インタビューを快諾された人であることから介護役割を受容できていない者はいなかったが，息子介護者のなかにはやむなく主介護者にならざるを得ない人が親と子のみの世帯として存在することを認識しておかなければならない。

2. 支援のあり方

母を介護する息子及び被介護者の支援者は，息子介護者が自分を育ててくれた母をどのような思いで介護しているのかを理解することが重要である。現在の母に対する感情だけでなく，昔の母のイメージや今の母の姿とのギャップ，子どもの頃からのきょうだいや父との関係，介護を行うことによる家族関係の変化などを把握した上で，息子介護者の陥りやすい否定的感情や母を介護していることによる肯定的感情を予測しア

セスメントする必要がある。息子介護者が母の生き様や性格を知っているがゆえに，それを介護方略として活かすことができる一方で，昔の母の姿とのギャップに悩むことも少なくない。支援者は，息子介護者が現状を客観的に捉えることができるよう，息子介護者が持つ知識や技術，マネージメント力などの資源を把握しそれを活用できるよう調整したり，同じ立場の人が集える場所を紹介したり，母の性格に応じた介護方略を一緒に考えるなどの支援を行う必要がある。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究では，インタビューを承諾してくれた人を対象としているため，母との関係が比較的良好である場合が多いと考えられ，母との関係が悪い状態で介護を引き受けた息子介護者の心理状態を表しているとは言いがたい。また，研究参加者の居住地が都市近郊の 3 市に限定されており，地域による偏りが生じている可能性も否めない。今後は，研究参加者を広域から選定したい。母との関係が悪い状態で介護を行っている人へのインタビューは困難であるが，介護を行うなかで関係が改善した人などへのインタビューを行っていきたい。

V. 結　　語

本研究で以下のことが明らかになった。

1) 息子介護者は，子どもの頃の母の姿と介護を必要とする現在の母の姿を照らし合わせ，母の言動を母の生き様や性格から意味づけていた。
2) 息子介護者は成人期以降も母（両親）との関係を継続しており，親の状況をおおよそ把握できる環境にあった。
3) 息子介護者は，母を介護しているという充実感を抱く一方で，子どもの頃の母のイメージとのギャップに悩み，現実としてふりかかる介護負担と相俟って心理的に追い詰められる危険性を孕んでいる。
4) 息子介護者が現実を客観的に捉えるよう支援するために，介護者が経験してきた現在までの家族関係を把握するとともに，介護者自身が持つ資源をアセスメントし，活用できるよう調整することが必要である。

開示すべき COI はない。

謝　辞

本研究にご協力いただきました研究参加者の皆さま，ご紹介いただきました皆さまに厚く感謝申し上げます。

参 考 文 献

1） 厚生労働省．平成 28 年国民生活基礎調査の概況．2017［引用 2018-01-03］．URL : http : //www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html
2） 石橋文枝．在宅看護における家族介護者の対人認知に関する研究 ―― 男性介護者の対人認知の実態 ――．藍野学院紀要 2002；16：74-8.
3） 桐野匡史．高齢者を在宅で介護する男性家族介護者の社会的サポートシステムに関する研究（科学研究費補助金研究成果報告書 2008-2009）．総社：桐野匡史；2010.
4） 桐野匡史．在宅で高齢者を介護する家族の介護関連デイリー・ハッスルと援助要請行動の関係．日本保健科学学会誌 2014；17(1)：14-24.
5） 馬庭恭子．男性介護者と今後のあり方．保健の科学 1996；38(8)：538-41.
6） 奥山則子．文献から見た在宅での男性介護者の介護．東京都立医療技術短期大学紀要 1997；10：267-72.
7） 湯原悦子．介護殺人の予防 ―― 介護者支援の視点から ――．東京：クレス出版；2017．p. 8-31.
8） 津止正敏，斎藤真緒．男性介護者白書 ―― 家族介護者支援への提言 ――．京都：かもがわ出版；2007．p. 54-62.
9） 松井由香．男性介護者の語りにみる『男性ゆえの困難』―― セルフヘルプ・グループに集う夫・息子介護者の事例から ――．家族研究年報 2014；39：55-74.
10） 斎藤真緒．増える男性介護者の実態と家族介護者への支援の課題．Community care 2016；18(9)：50-5.
11） 横瀬梨枝子．介護施設利用に到るプロセスへの一考察 ―― 認知症の母親と娘の関係性の視点から ――．生命倫理 2009；19(1)：60-70.
12） 横瀬梨枝子．介護施設利用に到るまで ―― 認知症の母親への息子の対応 ――．生命倫理 2010；20(1)：76-84.
13） 平山亮．迫りくる「息子介護」の時代 ―― 28 人の現場から ――（光文社新書：682）．東京：光文社；2014．p. 183-201.
14） 新鞍真理子，荒木晴美，炭谷靖子．家族介護者の続柄別にみた介護に対する意識の特徴．老年社会科学 2008；30(3)：415-25.
15） 春川美土里，矢吹知之，加藤伸司．在宅介護における認知症介護困難および良好の評価と介護者特性 ―― 在宅介護支援を行う職員からみた評価の特徴 ――．日本認知症ケア学会 2013；12(2)：387-96.
16） 岩田　昇，堀口和子．要介護者の性別および続柄別に見る在宅介護の認知評価，対処方略および生活への影響の相違．日本公衆衛生雑誌 2016；63(4)：179-89.
17） 厚生労働省．平成 28 年度高齢者虐待の防止，高齢

者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果．2018［引用 2018-04-01］．URL：http：//www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304250-Roukenkyoku-Koureishashienka/0000197120.pdf
18）上田照子，三宅真理，西山利正ほか．要介護高齢者の息子による虐待の要因と多発の背景．厚生の指標 2009；56(6)：19-26.
19）大島康雄．息子による高齢者家庭内虐待に関する一考察．北星学園大学大学院論集 2010；1：127-40.
20）山口麻衣．ケア・ミックスにおけるジェンダー関係 ―― 成人子によるケアに対する高齢者の選好の分析 ――．ルーテル学院研究紀要 2008；42：63-75.
21）内閣府．第 7 回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果．2010［引用 2017-03-01］．URL：http：//www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/kiso/zentai/
22）木下康仁．グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 ―― 質的研究への誘い ――．東京：弘文堂；2003.
23）木下康仁．ライブ講義 M-GTA ―― 実践的質的研究法 ――．東京：弘文堂；2007.
24）服部祥子．生涯人間発達論 ―― 人間への深い理解と愛情を育むために ――．東京：医学書院；2010.
25）小此木啓吾．対象喪失 ―― 悲しむということ ――．東京：中央公論社．1979.
26）文部科学省．子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題．2009［引用 2018-12-14］．URL：http：//www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryo/attach/1282789.htm
27）中西泰子．若者の介護意識 ―― 親子関係とジェンダー不均衡 ――．東京：勁草書房；2009.
28）国立社会保障・人口問題研究所．人口統計資料集 2018 年版．2018［引用 2018-12-14］．URL：http：//www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2018.asp?chap